

# 水の哲学

アラン

「人間は水と岩からなっている。  
水によって若返り、  
岩によって老いる」

フランスの哲学者アラン（1868-1951）の本名はエミール＝オーギュスト・シャルティエでアランはペンネームとして使われていた。教師を務めながら教育、政治、宗教、文学、科学、精神分析など多方面にわたる数多くの哲学的論考を遺した。もっとも有名なのは『幸福論』でラッセル、ヒルティの幸福論と共に現在も世界的に読み継がれている。

## プロポという哲学のスタイル

アランはノルマンディー地方の小都市モルターニュで生まれ、多くの著名人を輩出している国立高等師範学校を卒業後、リセの教師となった。

リセは大学準備教育を行う中等教育機関で日本では高校に相当する。修了者は試験に合格するとバカロレア資格という国家学位が授与され、全国の大学のどの学部にも入学することができた。いわば将来のエリート養成機関といっている。

彼はルーアンのリセで哲学を教えていたときに地元のデペーシュ・ド・ルーアン紙にアラン名義で「あるノルマンディー人のプロポ」というコラムを書き始めた。プロポはアラン自身が命名した哲学的エッセイのようなもので新聞や雑誌に発表

されたプロポは約5000篇にのぼっている。そのなかで幸福に関するプロポを集めたものがのちに『幸福論』として出版された。

## 身体の不自由と精神の自由

表題の「人間は水と岩からなっている。水によって若返り、岩によって老いる」という言葉は四季の変遷のなかで人間の世界を哲学的に考察した『四季をめぐる51のプロポ』に収められている。

ここでアランが「水と岩」によって表現しようとしたものはさまざまに解釈することが可能だ。



もっともシンプルに考えると水は柔軟性、許容性、流動性、岩は堅牢性、不動性、保守性などの象徴と見做すことができる。

人間は年をとるに連れてそれぞれ固有の経験に基づき一定の価値観や人生観や世界観を形づくる。それは人間的成熟へのプロセスであると同時に人間的固定化への道程といってもいいだろう。

比喩的にいうと人間は良くも悪くもだんだん「岩」になってゆく。「岩」は強固でなかなか揺るがないとはいえ特定の場所から動くこともできない。身体と共に精神もまた老いていくのだ。

アランはこうした精神の老化にしなやかさを本領とする「水」を対置した。身体が老いてゆくのは仕方のないことだとしても精神が老いてゆくのは避けられない運命ではない。若返りの魔法の「水」とは不自由な固定観念に囚われない自由な精神の象徴だという気がする。

## 譲りながら抵抗する

アランは自他共に認める反戦主義者でありながら1914年に第1次世界大戦が勃発したときはみずから志願して従軍した。すでに46歳になっていたから、きわめて異例の出来事だったと推測される。

彼は戦地でも哲学的思索をつづけ、負傷した際に『精神と情念に関する81章』という哲学概論を書いたりした。3年後に除隊してからはアンリ4世校で教鞭をとり、このときの生徒に異端の思



想家シモーヌ・ヴェイユがいた。彼女もアランと同様に高等師範学校へ進んで哲学を学び、スペイン内戦の際に義勇軍に身を投じるなど、その思索や行動には明らかにアランの影響を読みとることができる。

戦争を批判しながら従軍したアランの不可解ともいえる行動は変転する社会の只中で道徳的＝倫理的立場を築こうとするフランス・モラリストの哲学的伝統に拠るものという見方がある。教え子たちが戦場に赴いているとき、そこは無縁の場所で哲学を究めることなどできないという信念があったのかもしれない。

アランの『幸福論』の影響を受けてみずからも『幸福論』を書いた評論家の吉本隆明はあとがきのなかで「アランは日本の仏文学者から植え込まれたような芸術に深く執着した哲学者（には違いないが）というだけではない」「論理がもっている不幸と、その不幸にのめり込んでゆくときの幸福感をよく知っている人で、日本の文学青年や哲学青年の手におえるような人物ではない」と評している。アランの哲学を理解するには一定の年齢と経験が必要だということだろう。

アランは65歳で教職を退いたあと83歳で亡くなるまで執筆活動をやめることがなかった。静かな哲学者という印象でありながら「身体で従い、決して精神では従わないこと。完全に譲ること、と同時に完全に抵抗すること」という言葉を遺したアランは身体の不自由と精神の自由というアクロバットを命がけで演じつづけていたのかもしれない。（高倉）